

## 巻頭言

～私の百年史編集の経験から～

西田 尚紀  
(金沢大学名誉教授)

私は金沢大学医学部百年史の計画立案の責任を負いつつ著者としても86年分(1862～1948、文久3年～昭和23年)を書いたことがあります。これは昭和37年、創立百年に際して記念祭・記念講堂建設とともに計画されたものです。このときに各界から寄せられた寄金は、すべて記念式典と講堂建設に費やされ、百年史の編集に必要な経費は全く残されませんでした。前二者は金を整えればすぐできるのですが、百年史は「百年あるいはそれ以上に遡る知識を持つ人」を中心にしてこれに協力する「人体制」ができなければ動き出せません。百年史委員として勝手に名前を連ねさせられた40才そこそこの若い教授の私がどうしてもその中心として動かねばならないと決心するまでには9年の歳月がかかりました。私は教室員に「教授は百年の昔に一年間旅に出掛ける」と言い、研究室を離れ別に歴史編集室を設けてもらい、講義に出るとき以外はこの部屋にたてこもりました。中心の人が猛進すると委員の人たちも実によく協力して下さいました。今回の金沢大学五十年史は始めから歴史の専門家が携わるのですから、この人たちが自信と決断力を持って猛進されればきっと良いものができると思っています。それぞれの学部のものをもとめて統一され、一貫した格調を持つ通史を作ることは案外難しいことかもしれないとも思っています。

人の体制ができれば次に刊行の資金の問題があります。私の場合は書いた本がよく売れ、その資金で刊行費用を賄う以外に方法はありませんでした。約千頁の本を三千部作るには当時の金で一千万円位の経費がかかると言われましたので、1冊五千円とし二千部を売ればよいことになり、これ以上売れば利潤を生み、かねて約束の百年祭への高額寄付者あるいは諸機関へ無料で配付できるという見込みを立てました。この本の販売に当たっては全国の同窓会

に購入協力を頼みに回るといっていましたが、私はこの方法を一切採りませんでした。私は仕上がりつつある百年史の中から各時代のエキスとなる部分を抽出し、幾らかの出費も気にせず立派な見本(今の言葉ではカタログか)を作り、これを同窓生に配布し内容を示して購入してもらおう方法を採用しました。見本とともに購入の有無のみを返事するハガキを同封しました。やがて本が出来上がるといち早く送りました。意外に申し込みが多く二千部に近い申し込みがありました。申し込みの無い人には改めてアの手コの手の方法で申し込みを取る作戦を採用し、結局目標の二千七百部に到達することができました。これで百年祭の高額寄付者や百力以上の公的機関への無料配布も可能となり、また、剰余金もあげることができました。この剰余金は同窓会に寄付されました。実はこの時のものすごい連絡事務は、ほとんど同窓会所属のただ一人の事務員(由村和子さん)によって遂行されました。

長々と苦勞話を書きましたが、今回金沢大学五十年史の編集発行に当っては、当然のことながら経費の調達、その作業担当セクションの人たちが当たり、編集部は編集に専念されておられるはずですが、しかし、この際編集部が留意すべきことは寄金を出した人々あるいは機関の人々に対して「寄金に値する読み物を書く責任を持つ」ということです。私が最も腐心したのもこの点で読者に愛用されて読まれる工夫を凝らしました。例えば「百年余滴」や「百年覚書」の項などはなかなか人気があり喜ばれました。

最後に一つ私見を申し添えます。金沢大学は1999年に50年の歴史を持つことになりますから、この五十年史は「只今現在」を含むことになります。歴史のフィルターを欠いた歴史書は不確かで不用のものを含みやすく、第7章の「大学の現状と展望」のところでは、この点を充分認知して書いてほしいと思っています。委員のどなたかの言葉ですが、この歴史は「大学を客観的に見るものになりたい」とありました。客観者は社会(国家を含む)の人々であることを念頭に、由緒ある金沢大学五十年の血脈が伝わるものを刊行されるよう期待しています。

## ～ 青野茂行前学長を囲んで～

### 自然科学研究科の設置秘話などを懇談

大学院博士課程の設置は、金沢大学50年の歴史の中で画期的なできごとの一つですが、このたび青野茂行前学長をお招きして、主に大学院博士課程の設置にいたる経緯などについて、貴重なお話を伺いましたので、今回はその模様をお知らせいたします。

懇談会は、平成10年3月17日(火)に事務局で、青野茂行前学長を囲み、博士課程設置構想の作成などに当たられた土屋統一教授(文)、深谷松男教授(法)、北原晴夫教授(理)、坂本浩教授(理)、五味保男教授(薬)、江見準教授(工)や、50年史編纂委員会委員長の橋本哲哉教授(経済)、50年史編纂室関係者など十数名が会して行われました。

青野前学長のお話は、『現状と課題』(93年版)や『金沢大学50年史編纂ニュース・レター』No.6の巻頭言「自然科学総合大学院を考えていた頃」に述べておられる設置構想などにポイントが置かれたものでした。



昭和49年に文部省の視学委員による理学部の実地視察が行われた際、視学委員から、理学部、薬学部、工学部の教官と教育学部、教養部の自然科学系教官を合わせて、学部から独立した後期3年の博士課程の設置構想が示唆(このような構想は神戸大学でも話があったようである。)されたため、本学では、まず理学部を中心に総合大学院構想を模索し、学部長会議においてその考えを説明しました。しかし、これまで各学部で独自に博士課程の設置を検討していたことなどから、直ぐには皆さんの理解を得ることができませんでした。

豊田学長時代に、大学構造検討委員会の中に博士課程のための大学院問題専門委員会が設置され、当時理学部の私(青野)が委員長となりました。その後、大学院問題専門委員会は将来計画検討委員会の下部組織として、大学院に関する専門委員会へと移行していきます。

本学の専門委員会がようやく発足した頃には、東京工業大学の新しい大学院大学の考えがあり、さらには、総合大学院構想についても、神戸大学が設置計画書を文部省へ説明するという情報が入ったため、本学としては静観している訳にもいかず、急遽3専攻程度の計画案を作るということもありました。

しかし、その後の専門委員会の精力的な検討により、総合大学院は、人文社会系と自然科学系の2研究科とし、自然科学系の研究科は6専攻(基礎科学専攻、物質科学専攻、生命科学専攻、環境専攻、エネルギー専攻、システム専攻)からなる本学の総合大学院構想がまとめられました。

当時、神戸大学とお茶の水女子大学でもこれと同じ考えの動きがあり、結果として自然科学研究科は金沢・千葉・新潟・岡山・熊本大学は、神戸大学やお茶水女子大学の後を追いかけることになったと言えます。

この間には、若干の専任教官を置いて非常に小規模なものを設置するという考えも考えられたようです。これは、神戸大学とお茶の水女子大学の博士課程がスタートしたことにより、新潟、金沢、岡山大学が先陣争いの様相を呈したためです。大きなものを要求しても実現の可能性が低いという考え(先ず作ることが大切で、後で拡張していくという含みがあったかも知れませんが)から、当初計画された6専攻をそれぞれ大講座に組み替えて、1専攻6大講座の計画に変更しようとしたため、他の新潟・岡山大学の案とかなりかけ離れたものとなり、大変不評を買ったという一幕もありました。ところが、この本学の設置計画を聞いて一番驚いたのは飯島宗一氏で「飯島委員会」は大混乱したと聞いています。(飯島宗一氏は、文部省の「大学院の諸問題に関する

調査研究会議」（通称「飯島委員会」）の座長で、当時の名古屋大学長）そこで、概算要求の締め切りを目前にしつつ、本学では従来の6専攻案を念頭に、コンパクト化する案作りの作業に入り、「物質科学」「生命科学」「システム科学」の3専攻に組み替えて設置要求したのです。

このようにして自然科学研究科の設置がようやく実現したのですが、概算要求などの文部省との一連の折衝をめぐっては、連日にわたる新潟大学との情報交換、さらには岡山大学との連携プレーなどその間の動きには大変興味深いものがあったと思います。

自然科学研究科の担当教官については、新潟と岡山大学が全員参加方式であったことに対し、本学の場合は、個人参加を原則としていることが大きな特徴だと言えます。それは、自然科学研究科ひいては各専攻の運営などが弾力的に行えるという利点が考えられたためです。

自然科学研究科は、平成9年度から前期後期一貫の大学院に改組されましたが、私はその当時このような考えは持っていませんでした。それは、「修士・博士の一貫制は、将来好ましい」という考えもありましたが、

私の持論は、大学の教養教育や学部教育の基盤は学部が持っているもので、学部教育がおろそかになるという懸念があったからです。学部は教育や研究をすかなめではなく、faculty即ち教授団の集団であると考えていたからです。大学院の一貫制ということも一つの考えではありますが、学部プラス修士課程という考え方も別にあると思います。いずれにしても、大学院の設置形態を見ていると、今、日本の大学は巨視的にみれば試行錯誤の時にあると思っています。』



以上の他、設置構想を検討する過程で議論された「総合」や「各専攻（生命科学と医学の関係、物質科学、システム科学）の考え方」、学部教育と大学院の関係、教員養成、科学や学問に対する考え方など、さらには漱石、鷗外、また「流星は恒星からやってきた」との叙述を例に文学作品に見る自然科学の事象についても話題が及びました。

## 50 年史編纂室 室員自己紹介



志田 真弓

MAYUMI SHIDA

性 格：糸の切れた風

好きな言葉：たまにはいい肉を食べないと、本当のすき焼きのおいしさは分からない。

趣 味：銭湯めぐり

この4月から50年史編纂室で働かせていただいています。多くの方々の暖かいまなざしに支えられ1ヶ月が過ぎました。ありがとうございます。

高校生の時、毎日の通学途中、自転車をこぎながら「お城」を見上げ、金大祭でキャンパスを歩き少しだけ「金大生」になったつもりでいました。あの時食べたメロンフラッペの甘い味を忘れられない私が、金沢大学の中で働くことができとても光栄に思っています。今後ともよろしく願いいたします。



50年史編纂委員会委員

高橋 守信  
(がん研究所教授)

がん研究所は昭和42年5月結核研究所と医学部附属癌研究施設の統合によって創設された。文部省唯一のがん研究所として、平成9年度には、3大部門14研究分野への改組と分子薬剤開発センターの新設が認められ、わが国でも有数の規模のバイオメディカル分野の大学付置研究所になった。がん研究所創立とともに始まった研究所内部の対立、紛争の激化によって4年9ヶ月も教授会が開催されず、評議会を始めとして大学の各種委員会への参加も不可能であった苦しい時代を知る者にとっては感慨深いものがある。

がん研究所の創立は、わが国の、いや世界規模での疾病構造の変化を見透かした岡本肇初代がん研究所長の先見性と声望によって可能となったといつてよい。すでに医学部附属癌研究施設の創立に際して、同様施設を望む名古屋大学との間に競争があったが、岡本教授の学士院賞受賞の対象となった溶連菌毒素の核酸効果の研究から発展した、当時としては画期的な抗がん剤の開発の業績がきめ手となって金沢大学医学部への附設が認められたと聞く。何れにせよ、結核研究所からがん研究所への転換は、全国の同様の研究所の改組転換（例えば東北大学抗酸菌病研究所の加齢医学研究所への転換は平成7年度）より、はるかに先を行くものであった。

岡本先生の先見性は、がん研究所の方向性と研究組織の組織方針にまで及んだ。がんを生命現象の根本的問題と密接に関連する疾患ととらえ、分子生物学、分子免疫学、ウイルス学など当時の最先端の学問分野の研究者を、出身大学、出身学部の別なく招いたのであった（日本癌学会の主流が病理学者で占められていた時代であった）。

岡本先生が、がん研創立1年にも経たない昭和31年3月末に定年退官されたが、先生の時代をはるかに先んじた先見性が裏目に出て、研究部門間の、研究者間の対立がはげしくなっていた。あたかも全国的な大学紛争が金沢大学に及んできた時期であった。研究者間の対立は相互の人間の不信感にまで至り、修復には長い年月にわたる努力が必要となった。

紛争終結後29年を経て、現在のがん研究所は紛争の教訓を学んだ上で研究所の運営がなされている。研究所改組を機会に、基礎研究と臨床研究の協力によってがん研究を推進するという研究所の伝統をさらに発展させて、がんという人類の難敵の征圧のために一層努力を続けて行きたいと願っている。

## 50年史編纂室

## 日誌抄録

(平成10年2月～平成10年4月)

### 年月日

### 内容

10.2.23～3.20

3.9

3.11

3.17

3.26

3.30

4.4

4.8

4.10～

4.13

4.13

4.16

4.17

4.21

4.22

4.27

四高関係資料調査（於：石川県立歴史博物館・石川近代文学館）

中島坦氏（理学部化学科31年3月卒）各種資料提供のため、来学

（3月27日にも再度来学）

編集会議（第12回）開催

青野茂行前学長との懇談会 -自然科学研究科設置について-

教育学部所蔵の石川師範学校関係資料調査

金沢高等師範学校について元本学文学部教授金崎肇氏と面談

四高（昭和24年卒）同窓会開催（於：近代文学館）

編集会議（第13回）開催

金沢大学関係年表のデータ入力開始

畠中茂男氏（法文学部法学科28年3月卒）から資料提供の申し出

紘野義夫氏（名誉教授・元本学理学部教授）から金沢高等師範学校関係資料の提供

初道茂樹氏（教育学部体育科33年3月卒）から全国大学体育大会関係資料の提供

名古屋大学史資料室において、「イールズ関係文書」資料を収集（江森委員）

金沢高等師範学校・金沢大学の沿革資料について梅鉢幸重氏（名誉教授・元本学理学部

教授）と懇談

金沢大学50年史における研究教育に関する研究会を開催

宮川隆泰氏及び深井寛氏から四高関係資料の提供